序文
Foreword

「YME（Young Marine Engineers）海外派遣」によせて*

畔　津　昭　彦**

YME（Young Marine Engineers）海外派遣事業は21世紀における当学会の発展を目指して2000年に開始された事業である．同事業には，「研究等調査交流派遣」と「海外研究集会派遣」とがあり，前者は海外の学会との交流や派遣者の専門領域での海外研究機関・大学または企業との技術交流を通じて，国際的人脈と自身の技術力研鑽を目的とするものである．一方，後者は海外で開催されるマリンエンジニアリングに関連する国際研究集会に出席して論文発表を行い，海外の専門家との討議や意見交換を通じて，派遣者自身の専門領域をより進化させるとともに，国際的視野，国際感覚を養うことを目的としている．同事業は当初は日本財団の援助で始まったものであるが，2005 年度からは100%学会負担で行われている．

YME 海外派遣事業のきっかけとなったのは，発展的改革委員会から 1998 年度末に出された，海外派遣による若手会員の育成に関する答申であり，それを具現化しようとしたものである [1]．海外友好学会である英国の Institution of Marine Engineering, Science and Technology（I Mar EST，当時はI Mar E）が若手育成のために立ち上げたYME プロジェクトを参考にするとともに，本学会若手会員の海外派遣を通じて，I Mar EST のYME との交流を深める機会も作ろうとしたものである．なお派遣形式については国際交流委員会で慎重な議論が行われ，色々と変化してきている．

第1回目は5名の派遣使節員全員で団体行動をすることとし，I Mar EST を含めて全て同じ訪問先を同一日程で訪れる形をとった [2]．一方，第 2 回目以降はI Mar EST 訪問日程は全使節員で同日とするものの，それ以外の見学・訪問先は使節員ごとに独立とする形式が採用された [3]．なお調査交流派遣への応募者が減少したために，2005 年度以降はI Mar EST へのYME 訪問は行われていない．一方，海外研究集会派遣が始まったのは第2回目からであり，こちらは継続的に利用されているようである．

本稿の執筆にあたって過去のYME 海外派遣使節員の方々の報告を検索したところ，そのかなりの割合の方々は現在も研究委員会を中心とした各種委員会の委員として活躍してくださっており，また研究委員会委員長，代議員，理事も相当数おられることに感心させられた． JIME，さらにはマリンエンジニアリング分野の次世代を支える人材を育成することを目標として実施した事業であるが，同派遣事業が有効であったことを示す良い証拠であろう．

一方で気になるのは，海外研究集会派遣が中心になってからは大学，研究所の若手または学生が派遣使節員のほとんどを占め，メーカー若手技術者からの応募がほとんど無くなってしまった点である．ただこれは当初から予想されたことでもあり，海外研究集会派遣は官・学の若手と学生を主な対象として，また調査交流派遣は企業の若手を主な対象として企画されたものである．ほぼ全てのYME 使節員 OB の方々が経験された，調査交流派遣を通じて海外の同業種・異業種の若手技術者と交流することのメリットをもっとアピールすること，あるいはより魅力的な事業を企画する必要があるのかもしれない．

2017 年度の会員数増強委員会において，また 2018 年度の 10 年ビジョン検討委員会においても若手会員の増加と育成の重要性が認識され，YME 制度の有効活用が期待されている．2019 年度はYME 海外派遣も20 年目を迎えることとなるので，これまでの成果を踏まえて，新しい方向性を打ち出す必要があるものと考えている．本号の特集記事がこのためのきっかけとなることを期待している．

参考文献

1) 畔津「小特集号によせて」，日マリ誌，35 巻 12 号，p.795，（2000）．
2) YME 使節団「YME 使節団レポート」，日マリ誌，35 巻 12 号，p.796-808，（2000）．
3) 段「平成 13 年度 YME 使節員帰朝報告・討論会」，日マリ誌，37 巻 6 号，p.34-37，（2002）．

*原稿受付　平成 31 年 1 月 7 日．
**正会員　東海大学（平塚市北金目 4-1-1）．